

# 県小中学教研会報

発行 石川県小中学校教育研究会  
 金沢市若草町1番23号  
 金沢市立野田中学校内  
 電話(076)241-5191

編集 石川県小中学校教育研究会  
 広報部

印刷 株式会社 山 越

## ご挨拶



石川県小中学校教育研究会

会長 羽場 政彦

八月五日にオンラインによる第十回県小中学校教研研究会を開催し、県内多くの先生方に参加いただきありがとうございます。また、石川県教育委員会、市町教育連連合会、石川県小中学校長会、石川県PTA連合会様には本研究会の活動を支えていただき、この場をお借りして心より感謝を申し上げます。

本研究会は、国際化や情報化の急速な進展とともに、情報、知識、技術が社会・経済・文化の持続発展の基盤となる「知識基盤社会」へと変革している状況の中、子ども達がたくましく生き抜くための「生きる力」を育み、子ども達を持続可能な社会の担い手として育てるために設立されました。平成二十四年六月、十六の郡市学校教育研究会、二十四の教科等の研究団体が結集して、教育の質向上を目指し、研究や情報交換などの教育研究活動を続けています。十年目を迎え、一層、授業を中核とした教育活動の充実に取り組みんでいかなければなりません。今後、「令和の日本型学校教育」の構築を目指すべく、全ての子ども達の可能性を引き出す個別最適な学びと、協働的な学びの実現に向け、県内小中学校教職員が力を合わせ、指導力、

実践力を高めなければなりません。夏の研究大会をはじめ、今後開催が予定されている研究会は、教職員が一堂に会し、あるいはオンラインで行うことで、ネットワークを県内全域に広げ、授業研究や情報交換等の教育研究活動が活発に行われることを期待しています。

すでにコロナ禍となって二年半以上が経ちますが、教育においてもピンチをチャンスに代える実践がいくつもなされています。例えば、GIGAスクール構想により、一人一台の情報端末の整備で授業が劇的に変化し、児童生徒の意見交換がしやすく、映像やシミュレーションにより確かな学力の定着へとつながっています。

しかしながら、課題がないわけではありません。教職員のICTスキルの格差であり、どの教職員もICT機器を学習道具の一つとして使えるようにしなければいけないと考えています。また、教職員の大量退職、若手教職員の増加・教員を日指す学生の減少、教職員の働き方改革と、待ったなしの課題が山積しており、その対応が必要となっています。

さらに、子ども達の全人的な発達・成長を保守する役割や、

人と安全・安心につながることでできる居場所としての学校の役割は変わることはありません。そのためにも、教職員が多くの情報を共有し、切磋琢磨して授業力の向上を行っていただける本研究会は、今後ますます重要になってくるものと考えています。十年を一つの節目として、さらに進化・発展させて参りたいと思います。各会員をはじめ、関係団体のご理解とご協力をよろしく願います。

令和四年度  
 石川県小中学校教育研究会  
 第十回研究大会  
 令和四年八月五日(金)  
 リモート開催

### 《記念講演》

演題「GIGAスクール構想

とこれからの学び」

講師 中川 一史氏

(放送大学 教授)

二〇〇〇年代初頭は、教室にプロジェクトが複数台配置されているだけでICTが整備されていたといわれる時代であった。当時、高校の人体の授業でプロジェクトを駆使した面白い授業があった。その授業では、白色ボディスーツを着た教員に人体模型の映像を映し内臓や骨格を視覚化した。生徒は一樣に驚きと関心を持って授業に参加した。その後のICTの可能性が見えた授業だった。

現在はICTの使用こそ増えているが、使うこと自体が目的

になる場合が多い。子どもの資質・能力をどう育成していくのか、そのためにどうやって授業改善をしていくのか。端末の使用の方について考え直す時期に来ている。

「令和の日本型学校教育」では個別最適化学習が掲げられている。個別最適化学習のためには、教員の話す量を減らすことが必要である。それは「教員が不親切であること」と言い換えることができる。子どもの主体性を高めるために「教え込む」授業から子どもが「学びとる」授業へとシフトしていかなければならない。そのためにも個別最適な学びを推進するため、日常的にICTを活用してほしい。徐々に学校間での使用頻度の差が生じている。どの学校も使用頻度を上げていくことが大事である。しかし、ただ端末を活用してもよくはならない。AIと教員の経験値との共存が必要である。例えば、社会科でグラフ・表・地図を活用するのであれば、どの場面でもどのように活用することが適切なかを考えるのはAIにはできない。これこそ教員の役目である。AIと教員の経験値を組み合わせてこそ、個別最適な学びが実現する。また、学級で一斉に端末を「出す」「片付ける」を指示していかないだろうか。学習者の「個性化」が失われる指示である。子どもは自分で選ぶ機会を失っていないだろうか。端末を使用するということは、生徒指導上の様々な問

題に直面する。そのような問題はどの学校でも起こりえる。ICTの効果は生徒指導上の問題を経験しながら、加速度的に効果を上げていくものである。もっと子どもに使いたいように選ばせてはどうだろうか。

この先、学校教育法の一部改正に伴い学習者用デジタル教科書を使って授業を行うようになるかもしれない。ノート代わりにしてデジタル教科書に線を引き、書き込むことができる。音声読み上げ機能やノートメモとしても活用することができる。学習指導要領において情報活用能力は、各教科領域のねらいを支える基盤となる資質・能力の一つだと説明されている。「課題設定↓情報収集↓整理↓分析↓まとめ↓表現↓振り返り↓改善」に至るまでの力を付けていかなければならない。教員には教科書の位置付けや教員の役割さらには学校の在り方についても一度立ち止まって考えてみてほしい。当たり前を疑い、本当のGIGAの学習がどういふことなのか。制限と自由のバランスをとりながら一人一人の教員が考え、今後のGIGAにおける学校教育の充実を推し進めていってほしい。



### 《記念講演感想》

・中川先生の講演からGIGA端末の使用の法則が一番印象に残りました。学校でも私はなかなかうまく使いこなせていませんが、一方で上手に使っている方もいます。その方もスタートには今の私のような時期もあったと思います。使えば使うほど伸びる、活用力をアップさせることを目指してこれからもたくさん使っていきたいと思えます。

・中川先生のご講演より、再度GIGAスクール構想から始まる学校のイノベーションは非常に大きく、この変革期に教職員全員で多面的に学ぶ必要があると感じました。とても有意義な時間でした。本日にありがとうございます。本日は、大変貴重な学びをありがとうございました。中川先生のご講演では、多くの実践について知ることができました。特に、フローチャートを使った実践やデジタル教科書の多様な活用方法を活用していきたいです。「今までの当たり前前を疑う」という視点で、自分の実践を見直していきな

・ICTの活用が進められている現在、ICTを使うことでかえって労力がかかっていたり、複雑になったりしている現状もあると感じていました。ICTを活用する上で

「7つのしやすさ」に着目して、快適に活用していけると良いと思えました。(慣れのためには、まずはひたすら使うことからかもしれないですが...)最終的には、子どもたちが自ら最適な方法を選んで活用していけるようになると思います。

・中川先生の講演は大変わかりやすく、今日の参加者層だけでなく、GIGAにまだ及び腰の職員に対しても、非常に効果的な、ユニバーサルデザインの内容であったと感じました。簡潔にまとめて校内に伝達する研修を行います。

・講演会では、ICT活用の具体例がたくさん紹介されて参考になりました。八年前に提案されていたICT活用例が現実になっていることに、社会の変化のよさを痛感しました。合わせて、新規採用者の増加にともない、経験のある人もない人も同じスキルで生徒と関わる必要が生じてきている現状もあり、そこにもICTをうまく活用できればいいなと思えました。

・授業の中でICTを効果的に活用する具体例を多く聞くことができ、非常に参考になりました。児童にとって一人一台端末は文房具と同じで、自分のタイミングで使えるようになることが理想と知った。そのような状況を目指すために、指導者側がICTがアナログ

### 教科等別研究協議会報告

#### 第一分科会

発表①「石川県生活科・総合的な学習教育研究協議会 白山市立旭小学校 留田直子教諭・北島華織教諭」

白山市立旭小学校では生活科・総合的な学習の時間の主題を「他者と協働し、主体的に課題を解決しようとする子の育成」副題を「子どもが動き出す生活科・総合的な学習の時間をめざして」と設定し、重点①「子どもが考えたいと思えるような教材研究と単元計画」、重点②「根拠を明確にして表現するための言語活動の充実」を大切にして研究を進めた。

重点①では子どもが動き出す授業にするために、子どもの思いや思考の流れと教師のねらいやつけたい力を一致させていった。そのために、はじめに立てる単元計画は大まかなものにした。また、どの小単元で他教科と関連を図るか、そして、地域素材や人材の活用がで



きるか、想定しながら全体計画を立て進めた。

重点②では三つの具体的な手立てを設定した。ア実物を用いた多くの体験を取り入れる。イ思考ツールを活用し、整理・分類、分析する。ウ探究の意識を継続させるために、はつきりとした目的意識を持たせ、発信する際の相手意識を焦点化していくことを大切にしたい。

成果として子どもが動き出す主体的な学びの姿が見られるようになった。課題として「他者と協働する」について、整理・分析、まとめ・表現の部分では話し合いが十分に深まったとは言えず、表現する力をより高める手立てを講じる必要があった。

発表②「石川県学校図書館協議会 金沢市立厚桜小学校 木村容子教諭」

子どもたちの心を豊かにする学校図書館にするための取組について、金沢市小学校教育研究会図書館部会での活動から、子どもたちの心を豊かにする学校図書館を目指して「読む楽しさ 調べる楽しさ」のわかる子の育成をテーマに、四つの事例を基に発表が行われました。四つの事例とは、金沢市教育委員会学校図書館総括 高木欣子氏の講演、石川県学校図書館研究大会 金沢大会、研究授業実践、会誌「やまほし」の作成です。一点目、金沢市教育委員会高木欣子氏の講演は、情報の扱い方や情報四系列の位置づけ、

他教科での活用について学ぶ機会となったそうです。二点目、

石川県学校図書館研究大会は、学校図書館の機能と機能に合わせた整備、児童の資質・能力や情報活用能力、問題発見解決能力の育成と学校図書館の関連などを学ぶ機会となったそうです。

三点目は、金沢市立大野町小学校和田教諭の研究授業実践が取り上げられました。本の配架や置き方の工夫、学校司書によるブックトーク、担任と学校司書の連携による授業づくりを通して児童の本や学習活動への興味が高まっていったそうです。四

点目、会誌「やまぼうし」についてです。会誌「やまぼうし」には、各学校の取組、図書ボランティアや学校司書との連携などがまとめられており、次年度の取組の手がかりとなるそうです。発表後、学校司書との連携

の具体について質問が挙がり、日誌でのやり取りや直接話す時間をつくることなどが紹介されました。



第二分科会

発表①「石川県小中学校視聴覚教育研究協議会 金沢市立夕日寺小学校 吉田健二教諭」

「情報を主体的に活用し、」

ら学ぶ力をつけるための視聴覚教育の在り方を追求しよう、ICTを活用した主体的・対話的に深い学びをめざして」を研究主題として、算数科の実践を報告した。今年度は、①深める場面において本時のねらいに迫るためのICT活用の工夫

②単元のねらいに迫るための多様なICT活用の工夫を重点としている。複合図形の体積を求める本実践においてはWeb3D viewerを利用したことで、多

向から図形を捉えることができ、主体的に底面を捉え課題を解決することに繋がった。さらに、底面に着色しミライシードのオ

クリンク機能で大型モニターに映し出したことで、児童同士の考えを瞬時に比較共有でき、底面と立式的関係について

の理解と思考を深めることにつながった。

発表②「石川県特別活動研究会 内灘町立鶴ヶ丘小学校 谷口直也教諭」

「豊かな学校生活をつくる特別活動」思いを実現する学級活動をめざして」を研究主題として実践発表がなされた。児童一人一人の良さを活かして、より良い人間関係を築き、その上



画するため、話し合い活動を重視した指導・評価に取り組んだ。

①児童主体による学級会の運営②学級会ノートによる児童の考えの表出③合意形成における共通理解の三点である。また、評価では、学級会での話し合いが終わった後の即時評価と、学級会ノートを用いた事後評価を組み合わせ、児童が自己の成長に

気づくことができるよう評価を行った。成果として、自分たちで問題発見し、解決を目指すことで、児童の自

動性や能動性を引き出すことにつながった。

発表③「個人発表(社会科) 能美市立辰口中央小学校 本藏毅教諭」

「地域教材を活用し、社会的事象の見方・考え方を育む社会科学習」の研究主題のもと、三年社会科の実践を中心に報告した。実践にあたり、「社会的な見方・考え方」についての問題意識を明らかにすることや、写真資料や統計資料などの調査活動により、児童が自己と生活との関わりを考え、表現することを重視した。その際、「社会的な見方・考え方」を、「主に地理的」「主に歴史的」「主に公民的」の三つに分け、単元ごとに



どの見方・考え方を働かせればよいかを教材分析し、問題解決的な学習活動を構想した。本研究により、単元の学習の中心概念を獲得するための「社会的な見方・考え方」の育成に向けて、児童が「どこを見て、どのように考えればよいか」を意識できるように

問題解決的な学習を行うことが重要であることが明らかとなった。



第三分科会

発表①「石川県特別支援教育研究会 石川県立明和特別支援学校 長田一也教諭」

「農業分野への就労促進モデル事業の取組」について実践報告がなされた。

作業学習の授業で栽培班が、県内の八つの農業法人と連携し、年間二十五回以上現場での実習を行った。生徒たちは実習を通して、作物の成長に関しては理科、収穫における作物の大きさは数学科、商品化や販売については社会科や生活科の視点で多様な学びを



深めることができた。教師側は、作業学習における関連教科の内容を整理して指導していく重要性を確認できた。

農業法人にとっても、障害者雇用についての制度や体制を考える機会となったとのこと、生徒の就労を検討してもらったきっかけにもなった。

発表②「石川県養護教育研究会 白山市立松任小学校 小浦真由美養護教諭 石川県立工業高等学校 館由香利養護教諭」

「新型コロナウイルス感染症対策の影響による養護教諭の職務について」を研究主題として、長期化する新型コロナウイルス感染症拡大による、養護教諭の職務の変化と負担の増加から、その要因の明確化と考察を重ね、養護教諭の職務の効率化と力量の向上を目指す研究報告がなされた。

石川県養護教諭研究会員にアンケートを実施し、一昨年度と昨年度の数値を比較した結果、負担感が「軽くなった」の回答は少数であり、「変化なし」の回答が多数。この結果から、前代未聞の状況から現在まで持続して負担感が強いまま職務についている会員が多いことがわかった。具体的内容として、救急処置及び救急体制の整備について「困っている」という数値が二

倍に増加しており、これはコロナ禍の中での学校行事の再開が大きな要因となっていた。また、「健康診断」の際の消毒や感染

「健康診断」の際の消毒や感染

予防、三密を防ぐ環境作り、「保健室運営」の中の、ゾーン分け、ベッド使用、検温チェックなどについても50%を超える結果となり、未だ不安や困難を感じているという報告がなされた。

最後に負担感を軽減するポイントとして、管理職のリーダーシップと教職員間の連携、人的物的支援の整備、他校・保護者との密な情報交換、経験を生かすことが挙げられた。質疑では、検温の取組の実態と課題を話し合うなど、各校での現状を共通理解することができ、充実した協議となった。



### 〈研究会紹介〉

#### 加賀市学校教育会

本組織は、小学校十七校、中学校六校の三十八名で構成し、教育研究部、専門部、児童生徒対象行事の三つの柱で構成している。基本方針として①実りある実践研究を展開し加賀市教育の振興に努めること、②主体的に課題を持ち研究活動を充実させること、③目的を達成するために創意ある活動を展開することを目指している。

教育研究部では三回の開催を原則とし、うち一回は研究授業を行うこと、研究主題の趣旨に沿った市外研修を行ってもよいことを共通理解している。日頃校内ではできないような専門的な研修を積むこともでき、教科を通じて各学校間のつながりも強くしている。

専門部は加賀市教育の推進及び学校運営の資料を得るための研究を行い、各学校へ必要な情報を提供したり抱える課題について検討したりしている。

児童生徒対象行事についてはそれぞれ運営委員会をつくり計画運営にあたっている。今年度もコロナ感染状況を踏まえ、慎重に協議を重ねた。市内全六年生による「連合運動会」は三年ぶりに開催した。競技種目を減らし午前中のみ開催としたが、児童の達成感や他校との交流を深め意義のあるものとなった。「小学校音楽会」については、以前より新方式での開催を準備してきたが、練習中や当日の感染拡大を考慮し、中止とした。

今後子どもたちのよりよい教育のために加賀市学校教育会を充実させていきたい。

(文責 加賀市立山代小学校長 下野 哲夫)

#### 石川県特別支援教育研究会

石川県の特別支援教育

「障害のある児童生徒に関する心理学的、医学的、教育学的研究を推進し、特別支援教育の振興発展を図る」ことを目的として活動しております。会員は、県内の特別支援学級・通級指導教室設置校長及び教職員、知的障害特別支援学校校長及び教職員などで構成されています。

現在で、二三〇校一四〇〇名の先生方が所属しています。

理事会は、地区代表及び部長で組織しており、特別支援学級・通級指導教室部門（地区代表含む）から十七名、知的障害教育部会、自閉症・情緒障害教育部会、肢体不自由教育部会、通級指導教室部会から各一名、特別支援学校教育部門（知的障害教育校長会）から六名の計二十六名です。理事会は明和特別支援学校が事務局として開催しています。今年度より一回削減し、年三回としました。

五月に定期総会と「タブレットがあるとうれしい・タブレットがあると楽しい」読み書きが苦手な子どもたちの学習をサポートするテクノロジー」という演題の講演会をオンラインで開催しました。

八月には、特別支援教育を語る会をオンラインで開催し、「Society5.0時代の学びについて、一緒に考えてみませんか？」

十一月には石川県特別支援教育研究協議会奥能登大会を予定しており、奥能登地区学校教育研究会、石川県手をつなぐ育成会の後援で「一人ひとりの個性を生かすために」を大会主題として、奥能登地区小・中学校、特別支援学校（分校）の公開授業、八つの部会及び分科会、全大会、記念講演をオンラインで開催します。

令和四年度は、コロナ禍であっても、オンラインを活用して、研修会等の開催や目的が達成できるように計画を立案しました。

特別支援教育を取り巻く状況は、日々変化する社会への対応が求められる、現状の教育活動の内容及び方法に、工夫や改善を加えて新しい対応や取組を考えていく必要があります。そういった時代における児童生徒の「生きる力」の育成を目指し、本研究会が特別支援教育を支える教員への専門性を高める場として、これからも「特別支援教育の振興発展、会員同士の学び合い」を大事にしながら有意義な情報を提供していきたいと考えています。

(文責 石川県立明和特別支援学校長 釜親 明子)

#### 令和四年度役員

- 会長 羽場 政彦(野田中)
- 副会長 村上 誠(押野小)
- 〃 三井 松夫(能都中)
- 〃 山岸 朋子(浅野川小)
- 総務部長 大井川 久(諸江町小)
- 研究部長 坂井 文代(津幡小)
- 調整部長 松中 基(羽咋小)
- 広報部長 村田 浩彦(宝達小)
- 会計部長 濱田 貴宏(花園小)

#### 広報部員

- 部長 村田 浩彦(宝達小)
- 副部長 小向 敦子(町野小)
- 幹事 土田 友信(良田中)
- 〃 中川 欣哉(内灘中)
- 〃 清水外美江(広陽小)
- 〃 狩野 祐史(田上小)

#### 編集後記

新型コロナウイルス感染症の収束がまだまだ見えない中、本研究会の第十回大会が、昨年度に引き続きリモート開催となりました。しかしながら、今年度は講演会だけでなく、分科会での各団体及び個人の実践発表も行われました。コロナ禍の中ではありますが、先生方の教育にかける熱い思いや責任感が伝わってくる発表内容でした。今後、コロナ禍等の逆風に負けず、更に教研活動が活性化していくことを願っています。

第十八号発行にあたり、ご協力いただきました関係者の皆様にごこの場をお借りして感謝申し上げます。

(広報部 村田 浩彦)